

住民との協働・連携を意識した地域づくりの実践 —北海道石狩郡当別町の事例—

澤 田 慎 也

(当別町教育委員会社会教育課社会教育係主査
北海道教育庁石狩教育局派遣社会教育主事)

1 はじめに

都市化の進展や高度情報化等の影響による地縁的なつながりの薄れや人間関係の希薄化を背景として、地域を取り巻く様々な問題が指摘される今日、地域コミュニティの再生に向けた持続可能な取組が必要であることから、地域づくりを担う指導者やリーダーを育成するほか、地域の人材を生かした取組等、住民との連携や協働を意識した地域づくりの促進が不可欠である。自分自身高等学校教諭19年間の勤務を経て、教育の世界は決して学校教育だけで解決出来るものではないということを考え、社会教育の現場に入り北海道教育委員会派遣社会教育主事として、石狩管内当別町教育委員会勤務の命を受け、教育行政を初めて経験し現在3年目に入る。その中で、自分自身が試行錯誤しながらも各事業を担当し、各種団体等に関わりながら町民・地域住民に対しどのようなアプローチや仕掛けをし、関係者とのネットワークを構築し連携しながら、どのような観点で住民との協働を進めているかを事業の内容を紹介しながら、実践の取り組みをまとめたい。

勤務先である当別町は、188万の大都市である札幌市と境界を接し、札幌都

心部から約15～25kmに位置している。近年は、札幌市や江別市という産業集積地の隣地であり、石狩湾新港と新千歳空港とを結ぶ交通の要衝であること、昭和63年の札幌大橋開通やJR学園都市線の増便などから宅地造成がなされ、札幌近郊の田園都市として発展している。また、風景が酷似していると言われるスウェーデン王国・レクサンド市との姉妹都市提携をメインとした積極的な国際交流の町として、大きな飛躍が期待されている。また、人口約1万9千人の町でありながら教育環境として幼稚園から小中高校・大学までが揃っており、大学があることで若者が多く住んでいるのも特徴である。

2 生涯学習推進計画策定の取り組み

当別町ではこれまで平成10年度から5年毎に生涯学習推進計画の策定を行い、生涯学習社会の構築に向けて、方向性を明確にしながら積極的な取り組みを進めており、平成21年度を始期とした第3次生涯学習推進計画を策定した。近年少子化や高度情報化、科学技術の進展など急激な社会変化にあって、生涯学習の必要性やニーズはますます高くなるとともに、世代別の生涯学習の在り方も課題となっており、今次計画は、このような世代別生涯学習の方向性を加味しながら策定した。策定に当たり最初に町民対象にアンケートによる生涯学習に関する意識調査を行い、町民の生涯学習に対する考え方やニーズの把握を行った。次にその結果を参考にし、町内の各種団体関係者や一般公募の方々と構成した生涯学習推進計画策定委員会をスタートさせ、各委員より意見や提言を受けた。

また、翌年の夏には生涯学習60名セミナーを実施し、町内在住の中・高校生と策定委員、及び様々な業種や立場の20代から70代までの町民の方など総計60名を一堂に集め、まちづくりや地域づくりなどについて教育を視点にしながら、意見交換し学び合った。その内容も計画の策定に大いに参考にした。また、住民の意見をできるだけ多く取り入れたいことから、最終的な案作成に向け町民を対象にパブリックコメントを実施するとともに、その他様々な機会を生かして町民の意見を受け、当別町の今後5年間の新しい生涯学習施策の基本的な方向性を示す『第3次当別町生涯学習推進計画（ふれあいから

学びの輪へ～川、森、人の恵みのまち～当別)』が完成した。この計画では、全町民がそれぞれのライフステージに合わせ、主体的に学習活動などができる環境づくりを進めること、そして様々な学習を通して習得した知識や技術などを地域活動に活かすことにより、さらに活力ある地域づくりにつなげていただくことなどを目指している。

内容のキーワード1は、「ふれあい・かかわり合い」①異世代交流を促進し相互理解を深め、新しい生活文化の創造と伝承の推進②人と人とのふれあいを大切にし、人間性豊かな心を育む③「共助」「協働」の精神に基づき、ボランティア活動を促進し、支えあう社会の創造。キーワード2は、「体験・育み」①成長期の子ども段階に応じて養う社会力の育成ー「〇育」②自然体験、文化体験、社会体験等の活動の充実。キーワード3は、「学び」①現代課題に関する学習機会の充実②趣味や興味関心、生きがいを目的とした各事業の開催講座の充実③各支援情報の収集・提供・共有。キーワード4は、「ネットワーク・集い」①高齢化する地域社会を活性化していくためのネットワークの構築②女性団体連絡協議会、文化協会、体育協会、子ども会育成連合会等のそれぞれのネットワーク化の再構築。キーワード5は、「健康」①心身の健康の維持、増進や体力の向上②健康づくりの環境整備や気軽にスポーツを楽しむ環境づくり。キーワード6は、「連携・サポート」①当別町学校支援地域本部事業の推進②総合型地域スポーツクラブ支援事業の発展である。

年代毎に「乳幼児期」(0～6歳)から「熟年期」(61歳以上)まで8つに区分。その上で学校や家庭、社会で取り組むべき活動を、図を交えてわかりやすく説明した。例えば、1歳児には絵本を通じた親子のつながりを深める「ブックスタート活動」を行うほか、13～15歳は青少年活動サークルへの参加を通じて、地域のリーダーとして成長してもらう。また、40～60歳は、これまでの人生経験を生かし趣味のサークルなどで自らの個性や能力を伸ばすだけでなく、子どもたちを守り育てることが求められるなどとしている。

また、その前年1月に町教委が実施した町民アンケートで、第2次計画を元にした生涯学習の施策に満足しているかどうかを聞いたところ、半数近くが「わからない」と答え、施策そのものを知らない人が多かった。このため町教委として第3次計画は町民にわかりやすいものとを第一前提とし、計画の内容をできるだけ幅広く町民に知ってもらい実践してもらえばと考えた。

さらには、今後よりよい成果を生むためのステップとして、分析・判断などの評価が重要になることなどから、評価・検証を展開。事業毎に担当者等による事後評価をしたあと、年度末に社会教育委員が総括的評価を行い、評価をより明確化させることを重点とした。この5ヶ年計画を作成したことがいわゆる完成ではなく、目標でもない。今後の毎年評価検証を行い、見直しをしていく中で5ヶ年後に完成するという考えである。この毎年の評価を話し合うプロセスの重視が最終的なまちづくりへとつながるのではないかと考える。

3 中高生タウンミーティング事業の取り組み

第3次当別町生涯学習推進計画を策定する中で、具体的な内容の全体論議に入る前に、当別町内の中高生と地域の大人がつどい、教育を視点にこれからの当別町における地域づくりなどを語り合い、分かち合い、学び合おうと「当別町生涯学習60名セミナー」を企画開催した。その際に、子どもたちと大人のグループワークから「ボランティアとあいさつ運動を取り組みたい」といった声が挙がった。これを受け、教育委員会が主催運営する形で、次代を担う当別町の各中高生の生徒会代表等がつどう「当別町中高生 TOWN ミーティング」を開催することとなった。

1回目は、教育委員会関係職員が運営主体となり、社会福祉協議会ボランティアコーディネーターを迎え、ボランティアの役割そして町内にある共生型地域福祉ターミナルの役割等について説明してもらった。さらに関係職員より、自分たちの手で地域づくりを進める上で参考になる「政策マーケティング」について説明した。その後、本来のこのタウンミーティングのねらいである参加する中高生のみのお話し合いで、高校生ジュニアリーダーが中心となり、「駅の前に立ち挨拶をする」「除雪のボランティアをしてはどうか」などの声が挙がった。このほか「リングブルとペットボトルキャップの回収をしている」や「ボランティアとあいさつ運動」に関する各学校の取り組みについて情報交換した。最後に、生徒たちは「リングブルとペットボトルキャップの回収をしたい」との意識を共有し、各学校の生徒会に持ち帰り、実際に

行うか否かを検討し、次回にその結果等を話し合うことになった。

2回目のミーティングにおいて、各校話し合ってきた結果を交流し全体でペットボトルキャップ回収に取り組むことを決定し、それを受けてペットボトルキャップ回収方法や回収時期、PR方法などについて協議した。さらに「なぜボランティア活動に取り組むべきなのか」をあらためて再確認した。

3回目のミーティングで各校回収した結果を報告し合い、各校全校生徒や町民などを巻き込んで合計27,700個を集め、NPO法人全国障害者福祉援護協会北海道地区本部長へ寄贈し、国連児童基金（ユニセフ）などの関係団体を通して換金され、発展途上国の子ども達のポリオワクチンの費用などに充てられるという取り組みを成功させた。

その後、各校生徒会役員等が入れ替わるためあらためてメンバーを組織し、持続可能なミーティングになるような仕掛け（2年生1名、1年生1名を生徒会代表として選出推薦等）を検討した。

きっかけは中高生を含む子どもたちとさまざまな異年代異業種の大人の町民が参加した生涯学習60名セミナーだったわけだが、町内にある学校が単独ではなく、町内すべての中高校生で目標目的を一つにし、共有し実行に移したことは、次代を担う青少年の育成および今後のまちづくりや地域力向上に大いにつながっていると考える。

4 地域住民の変容と社会教育主事としての関わりならびに各関係機関との連携から学校支援への具体的なアプローチの検証

以下に具体的な実践事例から、地域住民と社会教育主事との関わりならびに関係機関との連携による学校支援に関して検証したい。

(1) 3つの事業から地域住民の変容と社会教育主事としての関わりの検証

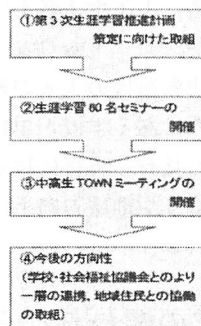
「当別町生涯学習60名セミナー〈当別町の明日を語るつどい〉」における地域住民との関わりから

事業の概要

事業趣旨	- これからの次代を担う中・高校生とさまざまな業種や立場の地域の大人で合計60名がつどい、これからの当別町における教育を視点として地域づくりなどを語り合い、分かち合い、学びあう。 - その結果を、将来的な当別町の生涯学習の推進に反映させる。
主催	当別町教育委員会
参加対象	町内在住中学生、高校生、大学生以上の地域住民(家庭・学校・社会教育関係者)
実施期日	平成20年8月2日(土) 13:15～17:30
事業内容	意見交流会 ＜ワークショップⅠ～当別をみつめ、考えるワーク～＞ 教育を視点として、当別の良いところ、改善すべきところを意見交換 ＜ワークショップⅡ～当別の明日を考え、分かち合うワーク～＞ 当別の良いところ、改善すべきところをどのように発展させ、改善努力していくべきかの共有

協働の取組の実態

【フローチャート】



①第3次当別町生涯学習推進計画策定に向けた取組

生涯学習推進計画策定に関わり、地域住民の参画による取組とするため、町内各種団体関係者や一般公募で組織する策定委員会を設置し、策定委員の意見と提言を直視した計画づくりに取り組むこととし、住民参画の一環として「生涯学習60名セミナー」を実施する。

②生涯学習60名セミナーの開催

策定委員をはじめ、町内在住の中高生から高齢者まで、様々な立場から地域を知る町民60名が一堂に集まり、コーディネーターに札幌国際大学准教授を迎え、当別町の良さや今後の課題等についてワークショップを行うものとし、生涯学習の視点から、その成果を推進計画の内容に反映させる。



(60名セミナーの様子)

③中高生TOWNミーティングの開催

生涯学習60名セミナーの成果を受け、セミナー参加の中高生(町内3中学校の生徒会代表2名ずつ計6名、当別高校より一般生徒2名、EZOリーダー代表高校生2名)が集まり、次代を担う若年層の視点で、これからの地域づくりに必要な取組についてワークショップを行うものとする。また、学校、社会福祉協議会(ボランティアコーディネーター)との連携により、中高生の話し合い活動をサポートする。



(TOWNミーティングの様子)

④今後の方向性

学校、社会福祉協議会との一層の連携のもと、子どもたちの豊かな発想を活かし、その主体的活動を地域の大人が支える取組に発展させたい。

地域住民の変容



(中高生TOWNミーティングの様子)

■「生涯学習60名セミナー」において、地域の大人から子どもまで、それぞれの視点から語り合い、学び合い、分かち合い、自分たちの暮らす地域の良さを再認識しながら、地域づくりに関わる課題を全体で共有することにより、自ら主体的に考え、課題解決に向けて取り組むきっかけを得ることができたものと考えられる。

■「生涯学習60名セミナー」において地域住民の関心を集めていけた「あいさつ運動やボランティア活動の活性化」について、「町の取組として自分たちにも何かできないか」と考える中高生たちが「中高生TOWNミーティング」に参加することにより、当別町の今後の地域づくりのために行動する若者のネットワークが形成されるとともに、地域に向けてネットワークを拡大する視点で意見交換を深める様子を見ることができた。

■今回の一連の取組において、町内の各中学校や高校、ジュニアリーダー組織より子どもたちがつどい、当別町の明日について語り合うことにより、地域づくりに対する意識が芽生えるとともに、青少年リーダーとしての視点もはぐくまれていることが考えられる。

社会教育主事としての成長

■社会教育主事として、多くの町民や異業種の方々等との関わりを保ち、学び合うことにより課題の整理ができ、新しい発想や多様性に富んだアイデアを生み出すことができる。

■学校、地域、行政、民間企業等と結び、中高生の主体的活動を支える仕組みを地域社会に構築することにより、地域課題を発見し整理できる人材及び、地域づくりの具体化に向けて取り組む人材の育成につなげることができる。

(出典) 平成20年度石狩管内派遣社会教育主事共同研究「石狩の樹」

(2) 各関係機関との連携から学校支援への具体的なアプローチとなる検証

実践レポートⅡ「事例紹介」② 当別町教育委員会社会教育主事 澤田 慎也
「学校支援への具体的なアプローチ」～当別町中高生TOWNミーティング事業実施に向けての取組～

1 はじめに

当別町は、平成19年度をもって東置小学校が閉校となり、平成20年度には小学3校、中学校3校、道立高校1校、私立高校1校の学域教育環境となった。それぞれの学校が独自の地域性を生かし、特色ある教育活動を展開している。しかし、各学校生徒会を中心とした単独でのボランティア活動や地域活動、小中連携した取組等が行ってはいないが、全町的な学校が目的を1つとして連携した取組や各生徒会を集めての交流等は皆無であった。そこで、教育委員会が主体となり、各校を結びつけるコーディネーター役を引き受け、社会教育的なアプローチから各校のリーダーを集めての情報交換なり研修会なるものを開催できないかと検討していた。そこで、町内の中高生の代表者を一堂に集め、情報交換なり地域づくりの学域の機会をつくり、1つの連携した取組につなげることが出来れば、それが学校支援を効果的に行う1つのアプローチにつながるのではと考え、下記の事業を展開した。

2 事業の概要

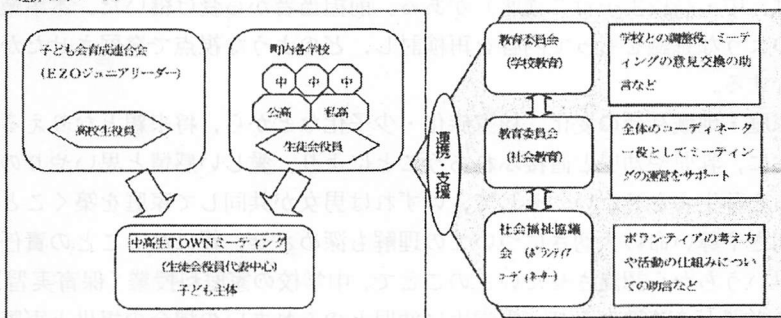
事業名＜当別町中高生TOWNミーティング＞＜主催＞当別町教育委員会 ＜時期＞1回目（平成21年1月）、2回目（3月）、3回目（5月）

＜目的＞①次代を担う若年層の視点で、これからの当別町における地域づくりに必要な課題についてワークショップを行う。

②中高生を中心に各学校と連携し協議しながら、それぞれの情報交換そして一歩の連携した取組を実施する。

③学校（生徒会等担当教諭）、教育委員会課職員、社会福祉協議会（ボランティアコーディネーター）等との連携により子ども主体の意見交換や企画運営をサポートする。

＜連携のアプローチ＞



3 成果

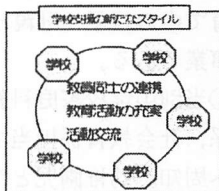
- ①中高生が一堂に集し、「当別町の明日について」考え、意見交換することは、地域づくりに対する行動意欲が芽生え、青少年リーダーとしての視点が育まれるとともに、子どもたちのその後の生徒会活動等において具体的な取組につながっている。
- ②社会教育主事がイベント役となり、学校現場主幹の活動から生徒の意欲が地域活動活動から活動に発展させることにより、学校と学校、特に中学校と高校を結ぶきっかけとなった。



子ども主体のワークショップ



全中高生連携ワークショップ恒例活動



4 今後の可能性

このように、社会教育事業を媒体として、学校を介したコーディネートや支援を十分行うことにより、学校間のつながりを生むことが可能となる。このことは、新たな学校支援のあり方と言えるのではないだろうか。今後はこの成果を活用し下記のような、より具体的な支援を構築したい。

①事業に参加した生徒達が「取組の成果を学校へ持ち帰り、自分の将来に活かす」ための支援

②各世代間で更なる情報交換の機会設定と、連携した地域活動の仕組みづくり

③TOWNミーティングをきっかけとした、生徒会担当教諭の連携や、生徒会活動が活性化するための支援

5 中学生子育て講座事業の取り組み

当別町は、社会教育推進の重点の1つに家庭教育支援がある。それは、「家庭の教育力向上への支援の充実」であり、地域ぐるみで子どもを育てる環境の整備をめざし、子育てに悩む親などに対する学習機会と情報の提供を図ることにある。さらに、親子の体験活動の充実や町関係部局、町内の各子育てサークル等と連携しネットワークの構築を目的としている。その中で、子育てに関する講座を展開し4つの事業（家庭教育支援基盤形成事業等）を開催しているが、その1つに次代の親となる世代を対象に、子育てに関する知識の習得と親となる意識の高揚を図ることを目的とした中学生子育て講座（以前は、中・高校生子育て講座）がある。前担当者から受け継いだ、本事業をどのような意識をもって内容を再検討し、どのような視点で発展させたかを紹介する。

家庭・地域社会の変化、核家族化・少子化などから、将来親となりえる中学生に、乳児や幼児と直接ふれあうことにより、愛しい感情と思いやりの気持ちを芽生えさせたい。そして、いずれは男女が共同して家庭を築くことの大切さや尊い命の大切さについての理解も深めさせ、親になることの責任感を早いうちから認識させたいとのことで、中学校の家庭科授業（保育実習）・総合学習との連携により、中学生に幼児とのふれあいの機会の提供と実際に子育てをしている親と赤ちゃんとのふれあいの機会を提供した。当別中学校（体育館）で3年生全3クラス合計100名、当別幼稚園4・5歳児合計90名、子育て中の親子（母親と1・2歳児）延べ16名と職員を合わせ、総勢200名の大事業である。

①当別中学校家庭科教諭、当別幼稚園教諭、福祉課保健サービス係・子育て係、社会教育係担当で打合せ。②家庭科で保育実習等の授業で本事業を生徒へ周知。幼稚園児と交流するための交流方法を指導。また学校祭においても展示する手作りの遊び道具を作成準備。③3学年3クラスの家庭科・総合学習（3時間分ずつ）の時間を使い実施。④幼稚園児は安全確保のため、スクールバス（10分程度）で移動。⑤幼稚園児・中学生共6グループがそれぞれと交流。30分程度交流終了後、園児は帰園。⑥実際に子育てしている母親

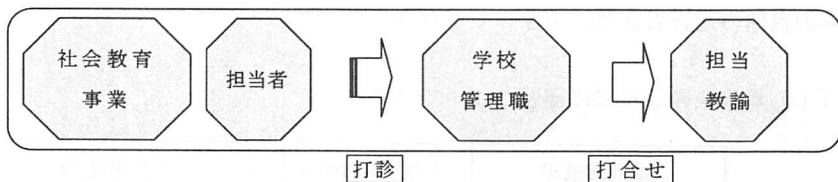
との交流「子育ての大変さや楽しさ、家族をもつことの良さについて」の話しなどを親の視点から、保健師がコーディネーターとなり30分程度中学生からの質問の返答も含め、話をしてもらう。

(1) 本事業の5ヶ年の経過について

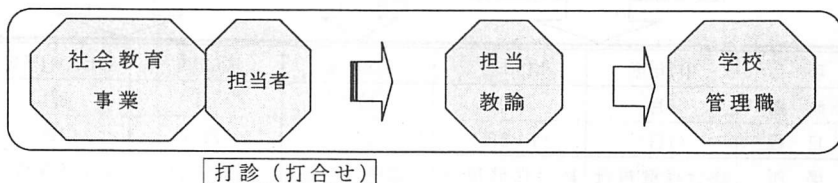
		参加要請型	学社連携型	三者連携型	
項 目	H17年度	H18年度	H19年度	H20年度	H21年度(予定)
時 期	6月	8月	10月	7月	9月
日 程	(1日)	(1+2日)	(3日)	(3日)	(3日)
場 所	総合保健福祉センター	総合保健福祉センター・当別高校	当別中学校体育館	当別中学校体育館	ふとみ保育所
対象者 参加人数	中学生・高校生 22名	中学生 9名 高校生23名	中学3年生 120名	中学3年生 100名	中学3年生 101名
講 師	(性教育) 山岸さん	(性教育) 山岸さん	(異世代交流) 中野さん	(子育て中) 母親	(子育てサークル)母親
特 色	講演会 グループワーク 中高校生一緒	事前研修 ふれあい体験 中高校生別2回実施	幼稚園児との交流 講演 中学3年生全員	幼稚園児との交流・子育て中の母親との交流・中学3年生全員	保育園児との交流・子育て中の母親との交流・中学3年生全員
連 携	福祉課 社会教育課	高校 福祉課 社会教育課	中学校 幼稚園 人材バンク 社会教育課	中学校・幼稚園 福祉課 ・子育て支援課 ・社会教育課	中学校・保育所 福祉課 ・子育て支援課 ・社会教育課
事業費	30千円	計60千円	30千円	0千円	0千円
このような機会がまたあると良いか?	参加したい50% 勧められれば参加したい50%	参加したい41% 勧められれば参加したい52%	思う 60% ふつつ25%	思う 64% ふつつ31%	

(2) 学社連携のポイントについて

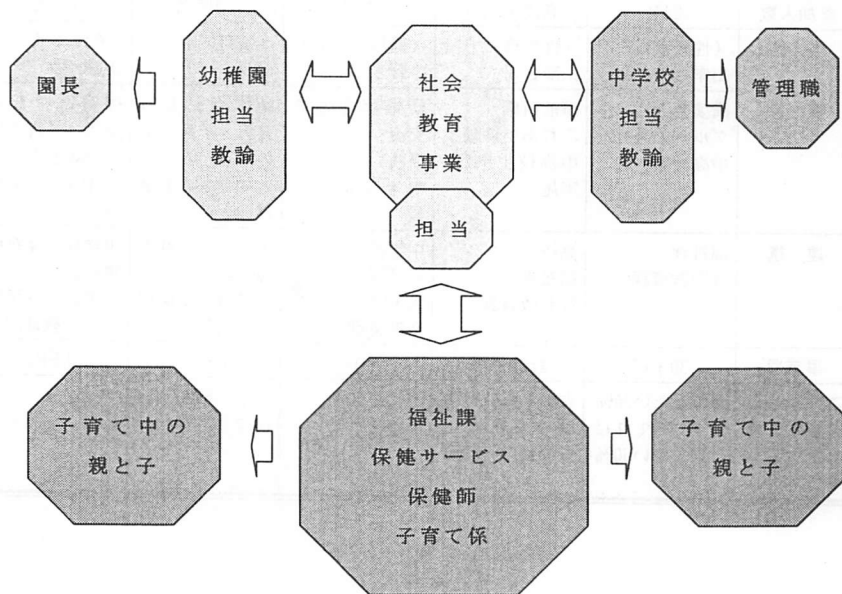
※ 学校との連携を行う上で難しいケース



※ 学校との連携を行う上で今回のケース



(3) 今回の三者連携について



(4) 成果について

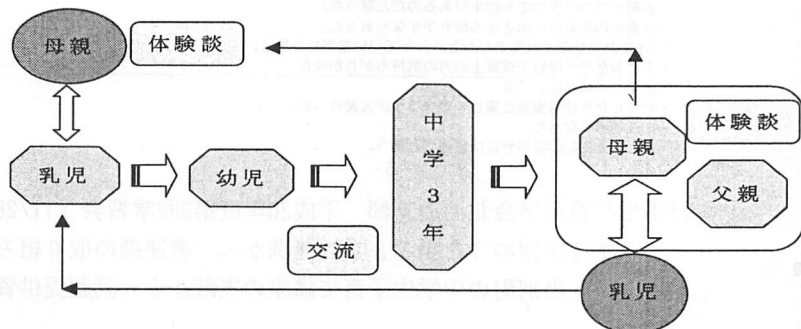
①アンケートのそれぞれの評価のパーセンテージが上がっている。②学社連携によって中学3年生全員が参加できる。③3者連携によって子育ての母親と乳幼児との交流ができた。④当別町生涯学習60名セミナー8月実施(町民各世代が集まっての「明日の当別を考える」意見交換)において、参加した当別中学校生徒会の生徒3人から、「当別の良いところ」の発言で「中学校の授業で、幼稚園児との交流があり子育てに関して学べる」と答えていた。⑤当別中学校の担当の家庭科教諭から「来年度は社会教育に関わってもらわず、授業で直接幼稚園を訪問したい。」と伝えられた。それは、中学校家庭科教諭の自発性を促し、学社融合を積極的に授業に取り入れたものといえる。

(5) 今後の方向性

①「参加者の反応や満足度」を上げたい。(家族間の交流、一人っ子や兄弟姉妹のケース)・弟、妹との接し方がどう変わったか。身近な乳幼児との接し方がどう変わったか。②「将来の子育てに関するさらなる展望」をもたせたい。結婚や家族をもつこと、子を授かることに興味を持ったか。③中学校OBで妊娠中や子育て中の母親(親子)が、授業(家庭科・総合学習・LHR等)で客員講師ができないかを検討。

(6) 今後の理想の展開

本事業に、乳児として親子で参加し、幼児になり中学生と交流し、中学生となってさらに幼児と交流し、最後には家庭を築き親となって自分の子どもと親子で参加する仕組みができ、持続可能なシステムが構築される。



202 各地の生涯教育

<資料2>平成20年度 中学生(当別中) 子育て講座
アンケート集計結果(回答100名) - 回答人数と主な理由

1. 幼稚園児との交流は?

- (1) 楽しかった 70名(70%)
・楽しく接して遊べた 25
・幼稚園児は元気だった 12
- (2) ふつう 24名(24%)
・大変だし疲れた 6
・どう接していいかわからない 3
- (3) あまり楽しくなかった 6名(6%)
・言うことをあまり聞かなくて疲れた 2
・扱い方がわからなかった

2. 子育て中のお母さんのお話は?

- (1) わかった 85名(85%)
・ゆっくり丁寧にわかりやすく説明してくれた 23
・いろいろ大変なことや子どもの話などを理解できた 22
- (2) ふつう 14名(14%)
・ためになったこともあったしなにもなかったこともあった
・まだよくわからない
- (3) あまりよくわからなかった 1名
・最終的に自分が何をすべきなのかわからなかった。

3. このような機会がまたあると良いか?

- (1) 思う 64名(64%)
・いろいろなことが学べる、勉強になった 17
・楽しかった 10
- (2) ふつう 31名(31%)
・疲れた 4
・どちらでも良い 3
- (3) 思わない 5名(5%)
・もういい 3
・疲れる 2

4. その他、今日の感想など

- ・楽しいと感じることが多かった。 19
・子育ての話はとても勉強になった。 16
・とても良い機会になった。またこのような機会があればうれしい。 15
・子育ては大変だということがわかった 10
・子育ては大変だが、楽しいし癒されるということがわかった。 8
・母親らしい子育ての工夫が聞けて勉強になった。将来役に立った 5
・子供たちがかわいいと思った。好きになった。 4
・また小さい子と遊びたい。ふれあいたい。 2
・今日の経験を生かし、ステキなお母さん(親)になりたい 2
・もし身近に妊娠している人がいたら助けてあげる。
・名前一つつけるのにも由来があるのだと思った。
・授業の内容を思い出させる部分がかなりあった。
・「生まれてきてくれてありがとう」っていい言葉だと思う。
・子どもたちと接して保育士の方の気持ちがわかった
・とにかく疲れた。 6
・どうしたら幼稚園児と楽しく遊べるかが大変だった。 5
・出産が怖くなった。
・子どもを生むのは自分には無理だと思う。

日本生涯教育学会北海道支部 平成20年度第3回学習会(11/26)

「生涯学習の今を学ぶ」学社連携から三者連携の取り組みへ
～当別町の中学生子育て講座の実践から～話題提供資料

6 「こころのふれあい通学合宿」in 当別事業の取り組み

平成21年度実施内容は、当別町子ども会育成連合会や学校・行政関係者などで行う実行委員会の主催。町内の小学5・6年生を対象に、5泊6日の期間中、総合型地域スポーツクラブ体験（キンボール）や食育体験、安心安全な小麦を使ったピザパスタ作り体験をはじめ、地域住民の家庭のお風呂を借りる「もらい湯」を行うなど様々な特色ある体験の取組を実施。地域の大人と地元のジュニアリーダーサークルに所属する中高生約40人がサポート。参加した子供達は、幅広い年代の町民と交流を図りながらかけがえのない時間を過ごす。

通学合宿期間中は、子ども達が「早寝、早起き、朝ごはん」を意識し規則正しい活動を心がけ、集団宿泊生活を実施し掃除や炊事などの生活体験活動を行う。21年度は、地元商店と連携し食材の買い出しも行い、店員から食材の見分け方を教わるなどした。2日目4日目の夜に地域の高齢者宅を訪問し「もらい湯」を体験し、入浴前後にもらい湯受入家庭の方との会話を楽しむ。合宿を通して、参加者の感想でも「いろいろな体験ができて、とても楽しかった」「親が大変なことがわかった」「何か手伝いをしようと思った」などがある。参加した子ども達の9割が、合宿中サポートしてくれたジュニアリーダーのように、いずれジュニアリーダーになりたいと答えている。実際にジュニアリーダーの中にも1年前、2年前に参加した子ども達が含まれている。ジュニアリーダーにとっても本事業に参加することは事実上の大きな実践活動の場にもなっている。また、実行委員会組織としての運営面でも様々な住民がかかわり支援することで、地域の子ども達を地域で育てる1事業になっており、それが横の連携・ネットワークから「地域の教育力向上」へと発展している。

7 結び

これからの地域づくり（地域コミュニティの再生に向けた持続可能な取

組)を進める上で重要なことは、「自分が暮らす地域に目を向け、地域を愛し主体的に地域づくりに取り組むことができる」住民を育てること。さらに、専門職として社会教育主事の創意工夫や仕掛けなどでその専門性を十分発揮し、様々な関係機関との連携の中で住民との協働を生みそれぞれの活動を支援していくことだと考える。社会教育の視点で住民に地域づくりの学びを仕掛け、それによって住民との協働が生まれていくことは、「社会教育における協働」になり、住民と社会教育主事が互いに学び、共に成長することが「協働の意義」そのものである。そして住民の意欲的な学びや活動と社会教育主事の絶え間ない成長こそ、さらなる発展的な実践を生み出すものとして今後も、町における住民との協働、連携を意識した地域づくりの実践活動の一層の促進を進めていきたい。